



Data

監督・脚本: ジョナタン・ヤクボウ
イツツ

出演: ジェシー・アイゼンバーグ/
クレマン・ポエジー/マテ
ィアス・シュヴァイクホフア
ー/フェリックス・モアティ
/ゲーザ・ルーリグ/カー
ル・マルコヴィクス/ヴィ
カ・ケレケシュ/ベラ・ラム
ジー/エド・ハリス/エドガ
ー・ラミレス

■■■ショートコメント■■■

◆私は“パントマイムの神様”と呼ばれているアーティスト、マルセル・マルソーの名前は知っていたし、マイケル・ジャクソンに影響を与えたという“ムーンウォーク”もよく知っていた。しかし、彼がフランス系ユダヤ人であったことや、ナチス占領下のフランスでレジスタンス活動を続け、結果的に陰しく危険なアルプスの山を何度も越えて123名のユダヤ人の子供たちを安全なスイスへ送り届けたという事実は全く知らなかった。

本作の監督は、ポーランド系ユダヤ人で、ベネズエラで最も有名な映画監督であり、ベストセラー作家でもあるジョナタン・ヤクボウイツツだが、彼はなぜ今本作を？それは、目の前に不安がいっぱいに広がる今の時代に子供たちを救うことは、自分たちの未来を救うことだ、というマルセル・マルソーのメッセージを伝えるためだ。さあ、『沈黙のレジスタンス』と題された、そんなマルセル・マルソーの感動の物語とは？

◆“フランスの恥部”と言われている「ヴェル・ディヴ事件」が起きたのは1942年7月。私が「ヴェル・ディヴ事件」をはじめて知ったのは『黄色い星の子供たち』（10年）を観た時だが、ナチス及びヴィシー政権 vs レジスタンスを描く名作は多い（『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集—戦後75年を迎えて—』131頁）。

本作導入部では、「ヴェル・ディヴ事件」よりずっと早い時期に、ユダヤ人の娘エルスベート（ベラ・ラムジー）が、いきなり“ユダヤ人狩り”によって父親シグモンド（エドガー・ラミレス）らがナチスドイツに拉致されていく姿が登場する。これによってエルスベートは孤児になったわけだが、エルスベートと同じように多くのユダヤ人孤児はどうやって生きていくの？

◆それに続くもう1つの本作導入部で見る、小さなキャバレーのステージでパントマイムを演じる青年マルセル・マルソー（ジェシー・アイゼンバーグ）はチャップリンを夢見る身勝手な若者。したがって、レジスタンス活動に従事している精肉店を営む父シャルル（カ

ール・マルコヴィクス)、兄アラン (フェリックス・モアティ)、従兄弟ジョルジュ (ゲーザ・ルーリグ) らとは生き方が全然違うらしい。

しかし、マルセルが思いを寄せる女性エマ (クレマン・ポエジー) や妹のミラ (ヴィカ・ケレケシュ) らともに、ナチスに捕らえられた123人のユダヤ人の子供たちを保護しようとする活動の手助けを頼まれ、渋々それを手伝うと・・・？また、その中で彼のバントマイムを通じて子供たちとの間に固い絆が結ばれてくると・・・？

◆占領下のフランスは、1940年6月には①占領地区、②自由地区、③併合地区、④保留地区、に分断されたうえ、対独協力政権として同年7月に生まれたヴィシー政権は、同年10月に「ユダヤ人排斥法」を制定し、ユダヤ人の取り締まりを強化していた。ゲシュタポ本部で指揮を執るクラウス・バルビー親衛隊中尉 (マティアス・シュヴァイクホファー) は、「レジスタンスの情報を提供すれば報酬を与える」とまでしてフランス人の分断を狙ったから、レジスタンスが少しずつ追い込まれていったのは仕方ない。その結果、男たちが外で活動している間にアジトに突入され、逮捕されてしまったエマとミラ姉妹は？

その後スクリーン上では、駆け付けたマルセルが列車に飛び込もうとするエマをかるうじて止めるシークエンスが描かれるが、今やナチ協力者のバッジを胸につけられて憔悴しきっているエマの姿を見れば、獄中で姉妹に何があったのかは明らかだ。そんな中、ナチスへの復讐を誓うエマに対してマルセルは、「ナチスを殺す代わりにユダヤ人の子供たちを救おう」と涙ながらに訴えたが・・・。

◆本作には、短いシーンながら『パットン大戦車軍団』(70年) で有名なパットン将軍が登場する。それは、アフリカ戦線、欧州戦線で活躍したアメリカ陸軍のパットン将軍 (エド・ハリス) は会場に詰め掛けた兵士たちに、“沈黙のレジスタンス” だったマルセルのことを物語るシークエンスだが、そんなシークエンスを含めて、本作は全体的にマルセルの成長物語、そして伝記映画になっている感は否定できない。

レジスタンス活動が続ける中で次々と犠牲者が出る中、それに屈せず、少しずつ成長し、子供たちのアルプス越え脱出活動に自分の役割を見出したマルセルは、結果的に123名ものユダヤ人の子供たちをスイスに逃亡させることに成功！これは「モーゼの脱エジプト」には及ばないものの、「ナチひとり殺すよりも、子どもひとりを助けるために」の考えを実践したすばらしい活動だ。本作は、そんなストーリーの中での“教訓” が見え見えだが、それでもやっぱりいいもの！

◆『ソーシャル・ネットワーク』(10年) (『シネマ26』18頁) で、機関銃のような早口で喋りまくる、億万長者に上り詰めるマーク・ザッカーバーグ役を演じた俳優ジェシー・アイゼンバーグが、本作では若き日のマルセル・マルソーになり切った真摯な演技を見せているので、それにも注目！

2021 (令和3) 年9月1日記